

## 令和7年度 第2回 介護福祉学科 教育課程編成委員会 報告書

日時 令和8年2月5日（木）13：00～14：30

場所 zoom形式

参加者 ※敬称略

（委員）

大久保 佳世（社会福祉法人愛和会 特別養護老人ホームはるびの郷施設長）

佐々木 宰（公益社団法人東京都介護福祉士会副会長／認知症介護研究研修  
東京センター客員研究員）

吉村 亜矢子（社会福祉法人 善光会 事業戦略室 室長）

（学校：日本福祉教育専門学校）

岸本 光正（校長）

東 康祐（通学事業部 部長）

齊藤 美由紀（通学事業部 介護福祉学科 学科長）

野田 朋法（通学事業部 介護福祉学科 副学科長）

後藤 健（通学事業部 教学マネジメント推進課 課長／司会）

星 朋美（通学事業部 教学マネジメント推進課 リーダー）

三村 美緒（通学事業部 教務マネジメント推進課 職員／書記）

議題：「2026年度の介護福祉学科教育カリキュラムについて」

1) 新たなカリキュラム導入のねらいが社会の動向と合致しているか

2) 介護実践現場において必要とされる人材が、学科の教育方針、方向性と合致しているか。

また、新たなカリキュラムを導入するにあたり、より現場で必要とされる人材養成と合致させていくために、どのような視点を取り入れ、教育プログラムを策定していけばよいか。

3) 多職種連携についてどう思うか

参考資料：「2026年度～2028年度の3ヵ年計画の概要」

＜2026年度＞

教育テーマ①『介護の未来を考え、新しい介護を創り出せる介護福祉士の養成』

＜企業連携カリキュラムの導入案＞

◆白十字 × CW 学科 ⇒ 高齢者や障害者の心が弾むおむつ開発

◆木下の介護 × CW 学科 ⇒ 未来の介護施設づくり（仮想施設）

◆介ポケ × CW 学科 ⇒ 介護福祉に役立つアプリ開発

◆ユニクロ × CW 学科 ⇒ ユニフォーム、エプロンづくり

知識や技術を教員から学ぶだけでなく、これからの介護の未来は学生が創っていくという観点から、企業と学生の共創により、新しい介護を創る楽しさを感じられる教育カリキュラムの導入を予定しており、現在、様々な企業と交渉中。

## 教育テーマ②『+αの知識と技術を持ち、多職種協働を実践できる介護福祉士の養成』

<学校間連携カリキュラムの導入案>

- ◆日福（言語聴覚学科）× 介護 ⇒ 誤嚥予防に強い介護福祉士の養成
- ◆医専（鍼灸学科）× 介護 ⇒ 全身の苦痛緩和に強い介護福祉士の養成
- ◆日リハ（理学療法学科）× 介護 ⇒ 生活リハビリに強い介護福祉士の養成
- ◆児教専（保育福祉科）× 介護 ⇒ 障害児支援に強い介護福祉士の養成

+αの知識が民間資格の取得にとどまらず、敬心学園の強みを生かした学科独自のカリキュラムを導入することで、学科の魅力づくりを図りたい。

また、介護実践現場において、介護福祉士養成課程のカリキュラム外の知識を学ぶことで、より利用者の生命・身体の安全と、QOL向上を目指した実践力を養い、現場で必要とされる人材を輩出した

い。

### 《2027年度》

教育テーマ『介護福祉の心を養い、高い倫理観をもつ介護福祉士の養成』

- ・座学中心学習から体験学習へと、授業方法の転換や体験学習の導入を図る。
- ・座学のみではない体験的な学びから、人を支援する仕事の重要性や介護福祉の心、倫理観を養う教育を展開する。

### 《2028年度》

教育テーマ『学生と教員の共創により、夢のある介護の未来を創造する介護福祉士の養成』

- ・教員自らが新しいことにチャレンジする姿勢を見せることで、学生の夢や介護の未来を広げる。
- ・必修科目（人間の尊厳と自立、認知症の理解、障害の理解等）の福祉理念の実践の場として、地域の高齢者や障害者との交流を図る新しいサービス（店舗等）を創設または創業を計画している。

## [各出席者からの意見]

### 議題1) 新たなカリキュラム導入のねらいが社会の動向と合致しているか

佐々木委員)

カリキュラム内容を聞いて学生が「実感」しながら理解していくことが、介護福祉士の質向上、ひいては介護福祉士の国家試験合格にもよりつながるのではないかと感じた。そういう意味で企業や多職種連携はいいと思う。介護福祉士のカリキュラムだけでは理解が十分にできないところを、学生に貪欲に知識を取り入れる姿勢を身に着けさせたいうえであくまで補うという視点で+ $\alpha$ を取り入れるのがいいと思う。一方で介護福祉士は介護人材全般と混同されがちであるが、実際は介護職全体の中で最も高い専門性と国家資格をもつのが介護福祉士であって、介護職の人材確保と介護福祉士の養成を同列に考えてはいけない。その介護福祉士としてのベースを動かさず、それを言語化できたり、見せたりする能力が現在の介護福祉士には足りない。そういうところをこのカリキュラムの中で身につけてほしい。さらに、介護の生産性というものを、単純に「業務省力化・効率化」と捉えるのではなく、業務を省力化することによって介護の質や利用者の生活の質を上げ、介護という仕事の意義や価値を高めるものと考えて進めていってほしい。新しいカリキュラムでも、介護福祉士がこのような資質を身につけて、他職種や他企業との連携における橋渡し役として育てていってほしい。

大久保委員)

このカリキュラムが素晴らしいという前提で話をしたが、今年度の技能五輪のエキシビションで現役の介護学科の高校生が優勝した。現場で働いている人も多くエントリーしていた中でこれが現実と感じ、改めて基本の介護技術あってこそその+ $\alpha$ だと感じた。この3ヵ年計画は素晴らしいが基礎をしっかりとやっとうえでの+ $\alpha$ を学校にいる間に身につけたほうがいいと思う。

野田副学科長)

技能五輪については生活支援技術という科目の中で出場を意識した技術を導入していて、令和8年度については日本人学生2名の出場を目標にしている。出場することで専門学校教育レベルの高さを世に広めたいと思っている。

吉村委員)

カリキュラムについては実現できたら学生は楽しい学生生活が送れると思う。一転社会の動向という点から見ると、介護施設の経営は厳しく、人件費が一番負担になっているというのが現実。それで生産性の向上を国も推し進めている。+ $\alpha$ や専門性を高めるというのもいいポイントであるが、(現在の介護福祉士養成校のカリキュラムで不足していると思われる)介護施設経営などの視点を踏まえたカリキュラムにするとそれが将来の生産性向上につながり、なおいいのではないかと感じた。

岸本校長)

当校としても国の財政を踏まえ国のお金で介護をすべて成り立たせるのは難しいであろうと考えると、ビジネス感覚を身に着けさせることの必要性を学内でも議論している。

齊藤学科長)

当校でも要介護利用者の介護を想定してそれにかかる人件費及び利益のシミュレーションを授業の中で取り入れている。自分の介護技術がいくらになるのか、そういう視点を持って初めて介護人材の報酬について意見できると学生にも教えている。

議題2) 介護実践現場において必要とされる人材が、学科の教育方針、方向性と合致しているか。

また、新たなカリキュラムを導入するにあたり、より現場で必要とされる人材養成と合致させていくために、どのような視点を取り入れ、教育プログラムを策定していけばよいか。

大久保委員)

長い目で見れば、学校の教育方針と介護現場において必要とされる人材が合致していると思うが、現状ではほとんどの介護施設が、日々の業務を安全にこなすことに精一杯であるというのが現実。現在の現場の指導者にこのような $+\alpha$ を活かせるような現場教育ができるかという疑問。現場の問題でもあるが現状では、現場に入ったことで失望させるようなことになってしまうのではないかと思う。

吉村委員)

理想と現実のギャップに悩む学生は多いと思っている。このカリキュラム自体はいいが現場とこのカリキュラムで学んだ学生の理想とのギャップが広がる可能性はあるように思う。新しい介護を積極的に取り入れ、前向きな職員も多い当施設でさえ目の前のケアに必死でそのようなところまで追いついていないのが現実。せっかくこのカリキュラムで学んだ学生が苦勞しないといいなと思った。

齊藤学科長)

現場の職員の疲弊はこちらも理解していて、卒業生からもギャップの話聞く。しかし、このままでは何も変わらない、当校の介護福祉学科から変えていきたいと思っている。少しでも介護業界を変えたいのでどうしたらいいかアドバイスをいただきたい。

吉村委員)

介護の業界が明るくならないと介護業界を目指す子供がいなくなるので齊藤学科長の意見には大いに賛同する。当施設はテクノロジーを積極的に取り入れているが、「格好いい」というプラスのイメージを持ってもらうためというのも目的の一つにある。さらにテクノロジーを取り入れて時間ができた部分をどう利用者に還元していくかというのも日々現場で考えているところである。生産性向上、負担軽減がひいては個別ケアにつながるというのが目的ではあるので、当施設はどんどん取り入れていきたい。その点ではテクノロジーを用いた新しい介護を日本福祉教育専門学校の学生と協力して打ち出していくことができるのではないかと思う。

大久保委員)

ギャップを少しでも埋めるには、テクノロジーやICTを導入する際に、(お金を出す)法人側に現場の職員が必要な理由を言語化してプレゼンする能力が不足していることが一番の弱みではないかと介護福祉士同士で話をしたところだった。自分の施設の金銭状況を把握して、どんな補助金なら使えて、どの種類の器具なら予算の中で購入できるのか、こういうことを分析できて、論理的に進められる能力が必要だと感じる。

齊藤学科長)

ご指摘いただいたプレゼン能力については私たちも課題だと思っている。そういう視点を学生に身に付けさせるための企業連携カリキュラムにしたいと思っている。気が付いた学校から取り入れて行動していきたいと考えている。

岸本校長)

医療業界でも多職種連携を進めていた時に、知識技術の習得はもちろん、プレゼン能力や傾聴力の必要性は言われていた。介護業界でも当校でもコミュニケーションのあり方やビジネスリテラシーを学生

に考えさせながら取り入れていく授業展開の必要性を再認識できた。

### 議題3) 多職種連携についてアドバイスいただけないか

吉村委員)

介護職は専門職の中で立場が弱いと感じている人もいるが、わたしは介護職も他の専門職と同等であるべきだと思っている。その中でどんな多職種連携がいいのかという点については、珍しい在宅ケアをしている人との関わりをもてると視野が広がるのではないかと思う。

大久保委員)

吉村委員の言うとおりに、看護と介護の関係についても、自分にない知識を得られるのをいいと思う人もいれば優劣つけてしまう人がいる。その中で傾聴力というのはとても大切であり、また相手の専門性に負けてしまわないよう自分の専門性をしっかり発信できることもとても大切だと思う。お互いの専門性を認め合う意識のもと、自分のことを言う力、相手のことを聞く力があって初めて多職種連携ができるのだと思う。そういう力を身に着けるためには、外の関連業種やご家族とつながってみてはじめて決して介護福祉士だけで利用者を支えているのではないと連携の意識がもてるのではないかと思うので、そういういろいろな職種や業種と接する体験を学生のうちにしておくことはいいことである。その際もただ相手の知識を享受するのではなく、自分たちのことも発信して互いの意見を交換し合うような機会にできればより意義があるものになるのではないか。

齊藤学科長)

実際、他職種の教員から、介護福祉士の1人の利用者に寄り添う支援を褒められたことがある。学生が介護福祉士としての自信をもてるよう、そして専門性を発揮できるよう多職種を巻き込んで介護福祉士の強みを伝えていきたいと改めて感じさせられた。

東部長)

介護人材からスタートした介護福祉士だが、いまやその専門性についても多職種連携についてもだんだん役割が進化してきている。我々も介護福祉士が介護福祉士を養成することに自信を持たなければならないと身をひきしめたいと思った。

野田副学科長)

施設長になりたいという学生もたくさんいるため、学生に他職種に関する知識やプレゼン、営業力も身に付けさせたい。そういう人間力向上も視野に入れての3か年のプログラム構成である。連携の授業の際や実習の際はそのような視点も意識したご指導をいただけるとこちらもありがたい。

齊藤学科長)

企業と連携して学生が生み出した商品を施設で使っていただくなど協力賜うことは可能か。

大久保委員)

学生の発想に触れることで職員も原点に帰ったり考えるきっかけになったりするものでぜひ一緒にしたい。

齊藤学科長)

学生が考えた認知症の人の夢をかなえるプロジェクトを今後は実現したいと思っている。そういう場所を善光会様にご提供いただけないか。

吉村委員)

善光会にも夢プランという類似した認知症の方向けのプロジェクトがあった。学生が作ったプランを

一緒にやることで職員の刺激にもしていきたい。

齊藤学科長)

学生と一緒に明るい介護業界を作っていきたいと思っている。ぜひご協力お願いしたい。

岸本校長)

理想と現実のギャップというのが印象に残った委員会だった。それを埋める作業を現場の方としていくことが介護の未来を創ることにつながると思った。協創していける間柄を作っていきたい。

まとめ

学生が介護福祉士の基本をしっかり身に付け、介護福祉士の専門性を理解したうえでの+ $\alpha$ や多職種連携が望ましい。また介護施設の経営に関する知識や、自分の専門性をプレゼンできる能力が実際現場で働く上では必要とされる。そういう力を身に付けさせるという視点で、また学生に他職種の重要性を体験してもらおうという視点で+ $\alpha$ や多職種連携の授業をしていくとよいのではないか。養成校出身の学生の理想と、現場とのギャップを埋めるためにも今後も現場の方との連携は必須である。

以上